



つながろう

CO・OP アクション情報

2012年11月28日

第 23 号

## 二度と悲しい思いをしないように

「桜ライン311」(津波到達ラインへの植樹)に、いわて生協職員参加



植樹の方法を教わったあと、各団体に分かれ植樹を行なった。

11月17日、いわて生協職員を含めた71人が「桜ライン311」の植樹活動に協力しました。少し寒い空の下、参加者は1本1本丁寧に木を植えていきました。



いわて生協職員は、4カ所の植樹を行なった。

「桜ライン311」とは、陸前高田市内約170kmに渡る津波の到達ラインに沿って、10mおきに桜を植樹する活動のことです。これは、桜並木を作ることで、「津波の恐れがあるときには

その並木より上に避難する」よう伝承していくことを目的とした、特定非営利活動法人 桜ライン311の取り組みです。

2011年11月6日から植樹活動が始められ、「2011年秋の植樹」で57人、「2012年春の植樹」で466人の参加者がありました。

11月17日には「2012年秋の植樹」が行なわれ、71人が参加。いわて生協からも、職員5人が参加しました。所定の場所に穴を掘り、苗を植えて、水をやります。

参加者の1人、いわて生協・住まいと暮らしのサービスセンター長の岩崎正美さんは、「いつも全国の生協さんから支援をいただいておりますが、この取り組みにも、全国各地から多くの方が駆け付けていました。あらためて全国の強いつながりを感じました」と話します。

同センターの内館祐香さんも、「桜を植えたラインは、海から随分離れていたことに衝撃を受けました。この桜ラインが少しでも後世に役立ったら」とその思いを話してくれました。

# 共に地域を盛り上げよう！

## 「宮古復興まつり」に、生協共立社・コープあいち・日本生協連が参加



にぎわう「復興フェスタ」の会場。

11月3日、いわて生協マリンコープDORAにて「宮古コープ復興まつり～笑顔・元気・絆～」が開催されました。当日は、天気にも恵まれ、約10,000人が訪れました。

復興まつりには、生協共立社（山形）の職員・組合員、コープあいち、

日本生協連の職員が参加。生協共立社の出店ブースでは「いも煮」「玉こんにゃく」の2大名物郷土料理の実演販売や、生協共立社との取り引きがある事業者・生産者から無料あるいは格安でご提供いただいたお米「つや姫」（山形おきたま産直センター）、「りんご」（大谷果樹組合）、「こんにゃく各種」（ヤマコン食品）などの販売を行ないました。

コープあいちの出店ブースでは、コープあいち独自の商品である「渥美半島めろんあいす」やこの間岩手県気仙地区での炊き出し支援などで提供し続けてきた「ジャンボ焼き鳥」、「五

平餅」などが販売されました。

復興まつりが終わったあとは、「お疲れさま！懇親会」がマリンコープDORAの会議室を使って開催され、参加者同士が労をねぎらいました。懇親会では、生協共立社とコープあいちから、いわて生協理事長の飯塚明彦さんへ募金の手渡されました。



フェスティバル終了後に行なわれた懇親会の様子。

# 「へちまを通じて話が弾みました」

## みやぎ生協が「へちま絆プロジェクト」の成果をコープこうべに報告



交流会では活発な意見交換が行なわれた。

11月5日～6日、みやぎ生協県北ボランティアセンター（VC）のメンバー（組合員）と仮設住宅の住人計7人が、この夏行なわれた「へちま絆プロジェクト」<sup>\*</sup>の報告のためにコープこうべを訪問しました。1日目は阪神・淡路大震災の3年後に建てられた災害復興公営住宅（兵庫県・芦屋市）でシルバーハウジン

グにおける生活援助員（LSA）の緊急対応・安否確認等の活動を視察し、2日目は交流会を行ないました。

みやぎ生協県北ボランティアセンター長の千葉淳子さんは、「へちまづくりを通じて、近所の方や組合員さんとも話が弾み、夫婦の会話も増えたとお話も聞いています。感謝の気持ちでいっぱいです。そのなかで、やはり、依然として孤立している方々への支援の課題は残っています。今後のサポート、橋渡し役は私たち生協の仕事と考えています」と話し、同副センター長の春日京子さんは、「コープこうべの皆さんから『できるかできないかはこちらで決

めるから、何でも言ってほしい。そうでないと何もできない』と言われふっきました」とお礼を述べました。交流会では、今後の支援のあり方について、互いに活発な意見が出されていました。

<sup>\*</sup>仮設住宅に引きこもりがちな住民同士の交流のきっかけづくりとして県北VCが取り組んだ、仮設住宅の夏の暑さを和らげる「へちま」のグリーンカーテンを作る活動。コープこうべが、栽培用プランターやネット、種などを送り、支援をした。



育てたへちまで作った「へちまタワシ」が、コープこうべに贈呈された。



「へちま観察記」も贈呈された。

# 被災された方々の自立支援にご協力ください

## みやぎ生協「手作り商品カタログ」を全国配布へ



手作り商品カタログの表紙。

みやぎ生協では、東日本大震災後の5月より、「みやぎ生協ボランティアセンター」を設置し、被災された方に寄り添った活動を行ってきました。

被災地のニーズは刻一刻と変化しており、発災2年目の課題は「ボランティアとして生活再建のためにどのような経済的支援ができるか」です（みやぎ生協生活文化部・須藤敏子さん／本

誌18号3面インタビューより）。

そこで、みやぎ生協ボランティアセンターでは、手作り商品を紹介するカタログを作成し、全国の生協に活用を呼び掛けることにしました。

このカタログには、生活再建のために取り組む方・震災で仕事や販売先を失った福祉共同作業施設などの手作り商品が掲載されています（24ページ。1ページに1団体ずつ商品紹介を掲載し、全67点）。

ご購入やお問い合わせは、直接、各団体の「申し込み・連絡先」への連絡となります。「商品カタログは11月28日より、希望する生協に配布を開始しました。1生協最大30部までお届けできます。ぜひお声掛けいただけたら

と思います」（須藤さん）。

カタログご利用の連絡は、FAXまたはメールで、生協名、担当者名、必要部数を明記の上、みやぎ生協ボランティアセンター（FAX022-218-3663、メールsn.mfukushinet@todock.jp 担当：須藤・山田）まで。



カタログの商品紹介ページ。

# 全国で商品を通じた復興支援を

## 日本生協連のインフラを生かし、東北の商品を全国の生協へお届け



宮城県の「ふかひれ濃縮スープ」（気仙沼ほてい（株））。

日本生協連では、商品供給を通じた被災地復興支援として、全国の生協に、岩手・宮城・福島各県の生産品や原料を使用した商品を紹介し、普及を進める取り組みを推進しています。

商品は、いわて生協・みやぎ生協・コープふくしまから紹介・販売依頼があった商品をリスト化して提示し、各生協はそのリストの中から、



福島県の「手繰りめん」（（有）やない製麺）。

供給する商品を選択。日本生協連の受発注・物流インフラなどの機能を活用し、全国の生協に届けることができるという仕組みです。商品は、加工品が中心です。

コープ九州では、全国に先駆け、11月22日～25日の日程で、コープ九州内16店舗で販売を開始。合計20種類の商品を供給しました。



エフコープ新宿店(店内)の復興支援商品コーナー。

# 福島の子どもたちを茨城に招待

## 「福島の子ども保養プロジェクト in いばらき」



10月に行なわれた保養プロジェクトにて。

いばらきコープは、福島県の子どもたちとその家族を茨城県に招待し、「福島の子ども保養プロジェクト in いばらき」を開催しました。企画は、10月27日～28日、11月10日～11日、24日～25日の3日程で開催し、合計29家族95人が参加しました。

企画づくりには、いばらきコープの組合員が参加し、いばらきコープ産地での収穫体験や観光施設の見学、筑波山ハイキングなどが組み込まれました。

また、今年は、国連が決めた国際協同組合年でもあり、茨城県ホテル旅館生活衛生同業組合、中央労働金庫といった県内の他の協同組合と協力しての開催となりました。

参加者からは「楽しかった」「子どもたちが外で走り回っている姿を見ることができてうれしい」「(ツアーの中で行なった) グラスキャンダルづくりは思い出になります」などの声が聞かれました。



「大きなにんじんとれた〜」収穫を楽しむ子どもたち。



陶芸にも親子で挑戦。

# 約 300 人が保養プロジェクトに参加

## 東京ディズニーランド、キッザニア東京で保養プロジェクト開催



キッザニア東京の「建設現場」でお仕事体験を行なう参加者。「楽しかった！」。

福島県生協連では、10月27日～28日、福島の子ども保養プロジェクト特別企画を行ないました。福島の中通り地区・浜通り地区在住の親子計306人がバス9台に乗り込み福島を出発し、1日目は東京ディズニーランド、2日目はキッザニア東

京で楽しい時間を過ごしました。

福島県では、学校・公園などの除染は行なわれていますが、それ以外の場所では進んでおらず、子どもたちのほとんどは外で遊んでいません。その光景に、県外から来た人は驚きます。福島県生協連の根本喜代江さんは、「驚かれるたびに、そういった情報が県外に伝わっていないということを実感します。それが悔しいです」と言います。

子どもたちを見守り、支え続けるためにも、保養プロジェクトの存在は大きいですが、9月に行なわれた「福島の子ども保養プロジェクトシンポジウム」※で出された意見の中には、「参加した子どもたちに無理

のない企画でなければいけない」という課題も提起されました。保養プロジェクトの目的を今一度考え、支援する側と支援される側が心を沿わせながら取り組むことが、今後求められています。

※シンポジウムについては、本誌22号にて紹介しています。



大型バス9台もの「保養プロジェクト」の企画は、今回が初めて。

## 宮城県漁協志津川支所に、ボランティア次々と みやぎ生協店舗でカキの供給開始



水揚げされ、一旦タンクにて保管されるカキ。収穫の喜びに、顔がほころぶ。

みやぎ生協の産直産地である宮城県漁協志津川支所は、カキ・ワカメ等の養殖で有名な産地でしたが、東日本大震災で壊滅的な被害を受けました。その志津川支所に、震災直後から京都生協をはじめ、多くの生協が支援を行っており、その支援は現在も継続されています。

コープしがは今年1月～10月

までに6回、大阪府生協連では、7月～10月までに4回、バスボランティアを実施しており、組合員・生協職員がわかめの選別作業や、土のう詰め作業、ホタテの貝に穴をあける作業などの手伝いをしてきました。大阪いずみ市民生協、京都生協は合同で5月に実施、コープしまねも3月に行ないました(コープしが、大阪いずみ市民生協・京都生協では12月にも実施予定)。

そうしたなか、10月には共同カキ処理場が完成し震災後初めての水揚げが行なわれ、11月8日からはみやぎ生協店舗にもカキが2年ぶりに並びました。

震災の影響で作業場が満潮時には

水浸しになったり、少ない人員でさまざまな作業をこなさなければならぬなど、まだまだ支援が求められる志津川支所ですが、着実に復興への歩みを進めています。

※ 志津川のカキの応援ソングができました！  
「南三陸志津川のかきのうた ようこそめぐみ野へ」  
(作詞・作曲・歌：亜 KIRA / 編曲・三浦一年)  
[http://www.youtube.com/watch?v=E4HO\\_CSJaHc](http://www.youtube.com/watch?v=E4HO_CSJaHc)  
(「YouTube 南三陸志津川のかきのうた」で検索！)



ホタテ貝への穴あけとワイヤー通しを行なう大阪府生協連ボランティアの参加者たち。

## 食のみやぎ復興ネットワーク※開発商品続々

### 11月開発商品、一部ご紹介！

※食を通じた復興に取り組むプロジェクト。現在の参加団体は211団体。地場農産物を対象にさまざまな商品開発が行なわれている。



なたねプロジェクトの「菜の花はちみつ飴」。製造者：(有)蔵王の昔飴本舗、50g入り、198円。

### ●なたねプロジェクト「菜の花はちみつ飴」提供開始

食のみやぎ復興ネットワーク活動の一環である「なたねプロジェクト」は、耕作放棄地を防ぎ、地域に新しい特産品を作ることを目的に、宮城県岩沼市玉浦地区の被災した農地に菜種を植える取り組みです。その菜種からとれた菜種油が、岩沼市立玉浦小学校・玉浦中学校の学校給食で

使用されることになりました。また、菜の花から採取したはちみつで作った飴は11月22日より、みやぎ生協全店舗で供給されています。

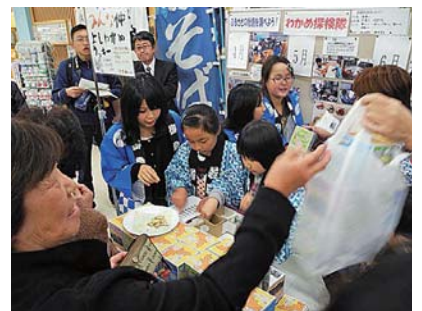
### ●「ふっこう みんななかよしわかめクッキー」、いかがですか？

被災した石巻市立大原小学校の子どもたちが、地元でとれたわかめを使い「ふっこう みんななかよしわかめクッキー」を作りました。

これは、「自分たちの視点で地域を見直す」ための学習の一環として企画されたものです。地元の表浜漁協で出荷が再開されたわかめを原料とし、クッキーには自分たちで考えた名前を付けました。この活動を

知った宮城県漁協は、「食のみやぎ復興ネットワーク」でつながっているみやぎ生協に何か応援できないかと相談し、みやぎ生協石巻大橋店で宣伝、供給することになりました。

11月17日、500個限定で子どもたち自身がクッキーの販売を行ない、1時間半で完売しました。



販売、店内放送など大忙しな子どもたち。

# 「すきまを埋めていく復興」が求められる

## コープあいちのツアーからみる、岩手県気仙地区の現状

ライター：野口武

11月9日～11日の3日間、組合員25人が参加し、コープあいち「学びと交流 with 三陸気仙」が開催されました。コープあいちは、過去に10回の被災地交流ツアーを実施しています。11月現在の岩手県気仙地区の様子を報告します。

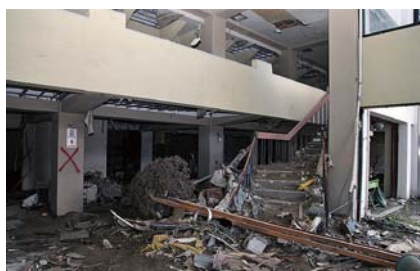
### ●がれきの山が残る陸前高田

組合員一行は、津波によって街全体が壊滅的な被害を受けた陸前高田市を訪れました。かつて街があった場所は、雑草に覆われた野原となり、市役所や体育館などいくつかの建物だけがかるうじて残ります。朽ち果てた建物の1階にはがれきが残り、津波の脅威がうかがい知れます。

現在、これらの建物の取り壊しが急ピッチで進められ、かつての街の面影は日毎に失われつつあります。街の再建に向けて動き出してはいるものの、まだがれきの山はいたるところにあり、街が形成されるまでには早くとも7、8年はかかると言われます。

### ●前に進めない現状

阪神・淡路大震災では、2年を過ぎた頃から多くの人が仮設住宅を出て自立し始めました。しかし、岩手県沿岸部の気仙地区では、いまだ90%の人が仮設住宅を出るめどが立っていません。生計を立てるため



市民会館の1階には今もガレキが積み重なる。



陸前高田の住民と固い握手を交わすコープあいち組合員（右端）。

の仕事の不足、膨大な時間を要する地盤沈下した土地のかさ上げ、高台の土地の価格高騰など、さまざまな問題が重なり、多くの人々が前へ進めない状況です。先行きの見えない中で、仮設住宅での生活が長期化することが予測されます。

### ●感じられた変化

震災から1年8カ月。ツアーに複数回参加している組合員は、今回ある変化を感じたといいます。それは、これまで交流してきた方々が、身内の死について話し始めるようになったことです。気仙地区の人々が、近い人の死を受け入れ、次への一歩を進めるよう努力をしている証なのかもしれません。

### ●今、必要なこと

同じ気仙地区で活動をすすめている神戸大学大学院教授の松岡広路さんは、今回コープあいちが開催した現地支援団体の交流会で、「今必要なのは、被災地の方々と交流しながら、地道に進めていく『すきまを埋

めていく復興』です」と語りました。被災地は今、一人ひとりに寄り添い、孤独や寂しさなどを抱える人の「精神的なケア」を視野に入れた、長期的な支援を必要としています。

今回のコープあいちのツアーでは、組合員と被災地の方が、連絡先を交換する場面をよく見かけました。個と個がつながり、「友」として、被災地の問題に取り組んでいこうとしているのです。また、現地で手作り品を作っている方との交流もツアーに組み込まれていました。コープあいちの被災地交流ツアーは、組合員が被災地の人々と交流する中で、愛知にいながらにして現地の人々どどのように協働していくのかを考え出していく段階に進んでいます。



手作り品を作る方々との交流の様子。即売会も行なわれた。

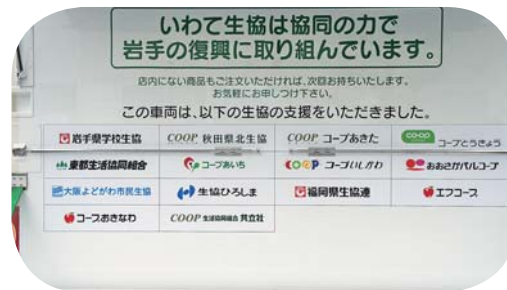
# いわて生協：「にこちゃん号」3台目運行開始



2台目の「にこちゃん号」の車体。募金に協力した合計8生協の名称が車体に入っています。



いわて生協では、買い物に不便な地域で移動店舗「にこちゃん号」を運行しています。車両は、県内の組合員と全国の生協からの募金で購入したものです。



3台目の「にこちゃん号」の車体。募金に協力した合計14生協の名称が車体に入っています。

宮古市内で6月18日から運行が始まった1台目続き、10月24日には、2台目が釜石・大槌地域でスタート、そして、11月16日には3台目の運行が陸前高田・大船渡地域で始まりました。広報室長・吉井いづみさんは、「全国の皆さんの支援で3台走らせることができました。ありがとうございました」と話していました。

## 2011年台風12号被災地からの報告～三重県・和歌山県～

三重県では、2人の命が奪われいまだ1人の方が行方不明です。災害時には、コープみえがボランティアセンターに食品の提供を、三重県学校生協が熊野地域の学校に水を届けました。災害復旧事業の進捗状況は70%ほどで、100%になるにはあと2年程度かかる予定です。被災地域は、「高齢化問題」「買い物難民」「人口減少」など多くの問題を抱えている地域であり、三重県生協連事務局長の岡本一朗さんは、「協同組合の力が少しでもお役に立てば」と話していました。

和歌山県では、56人の命が奪われ、5人が行方不明です。災害時、わかやま市民生協では飲料水・缶詰・フードパック・ごみ袋などを提供しました。現在、主要道路は復旧していますが、堆積した河川の土砂により川が氾濫しやすくなったままです。また、仮設住宅の住民の過半数以上が今後の見通しが立っていない状態です。和歌山県生協連では、今年9月末から、和歌山県社会福祉協議会の要請を受け、災害ボランティアセンターの協力団体となりました。

また、三重県、和歌山県、奈良県の各県生協連が合同で開設した「台風12号災害支援募金口座」には、全国約40の府県連・生協から約3,700万円の支援募金が集まり3県で配分されました。

※奈良県情報は、本誌22号にてお知らせしています。



## 「伝えたい被災地」

このコーナーでは、ライター荒川和巳さんが被災地に入り、見たもの、感じたものを、お伝えしていきます。

「東北の生協は、発災直後から被災した職員や理事が率先して動いていたと聞きました。私は、それができなかった。悔いがあるんです」

関西地域の生協の職員さんがこう明かしてくれた。

自分は何もできなかった。今も、できていない……。取材をしていると、職員さんたちに限らず、こんなふうに無力感を募らせている人が多いことに驚く。

しかし、よく考えてみたい。個人の力は小さいし、大規模災害を生協だけで救えるわけもない(そもそも政府だってできてないのに)。大切なのは、何ができるのかを考えることではないのか。被災地に行けなくても消費で支援することはできるし、自分しかできないスゴイこともあるかもしれない。

まだまだ被災地にはいろんな問題がある。ずっとつながって行くために、自分のできることを考え続けていきたい。心からそう思った。



晩秋に薫る金木犀(福島市内)。※写真と本文は関係ありません。

## 「全国の会員生協に向けて被災地復興支援ツアー（モデルコース）」のご提案

コープトラベルみやぎでは、「被災地を訪問したいけど、どうすればよいか分からない」などのお問い合わせに応じて、沿岸部での観光、お買い物を含めた団体・グループ向けの被災地視察モデルコースをご用意いたします。ご訪問の日程・人数に合わせてお手配・アレンジいたしますので、まずは電話・メールでお問い合わせください。

お問い合わせ先：コープトラベルみやぎ担当：東（あずま）または高橋まで。電話番号：022-717-5081 メール：高橋 喜信 sn.m30853yt@todock.jp

旅行代金（お一人様）	大人 34,800 円／子ども（小学生）32,800 円／幼児（未就学児）30,800 円（4 名様 1 室でご利用の場合） 3 名様 1 室でご利用の場合は各 2,000 円増し、2 名様 1 室でご利用の場合は各 3,000 円増し ※上記料金は 20 名様以上、中型バス利用で算出しております。人数の増減により旅行代金は変わる場合があります。
発着地	仙台空港の発着を想定していますが、仙台駅からでも可能です。（発着地より添乗員が同行します。）
旅行代金に含まれるもの	バス代金、ご宿泊代金（1泊2食）、昼食代（1日目、2日目）、遊覧船代、拝観料、観光ガイド代、ボランティアガイド代、添乗費用
行程（モデルコース）	宿泊予定ホテル：松島センチュリーホテル ・仙台空港発（10:00）==== <仙台東部道路> ==== 塩釜神社（参拝）==== 浦霞酒造 酒ギャラリー（お買物）==== 松島海岸（昼食）==== 松島散策：「五大堂・瑞巖寺（観光ガイド同行）」・円通院（数珠つくり体験）・松島さかな市場にてお買物==== ホテルへ ・松島海岸（9:50）==== 遊覧船「芭蕉コース」（所要 50 分）==== マリンゲート塩釜==== 鐘崎笹かま館又は伊達の牛タン本舗（昼食）==== 荒浜地区視察==== 閑上地区視察、閑上さいかい市場（お買物）==== 仙台空港（16:00 頃）

## 支援募集情報

○岩手県生協連：山田ゾンタハウスへの軽食支援として、180 万円が必要です。可能な金額でかまいませんので、ご支援よろしく  
お願いいたします。連絡先は、岩手県生協連専務理事 吉田 敏恵さん（019-684-2225）まで。

○いわて生協：

- ・被災地ツアー（観光を含んでも可能）、被災地ボランティアツアーの企画・実施
- ・被災地のお母さんたちや福祉作業所などの復興応援商品の販売協力（宅配以外のイベント等での取り扱い協力など）
- ・被災メーカーの商品や復興応援ギフトなどの店舗・宅配での販売協力
- ・中小仮設住宅の支援：連絡先は、いわて生協組織本部 小野寺 真さん（019-603-8299 月～土 9:00～18:00）まで。

新着

○復興支援プロジェクト「かけあしの会」：被災された方の手作りで製作し、収入源となっている「あわびの貝グッズ」。このたび、新商品として、あわびの貝殻を使用した電気スタンド「あわび蛸一三陸絆」を開発し、近日発売予定です。

作業に対し、貝殻が足りていません。スタンドに使用できるサイズ（横幅 10cm 以上）のあわびの貝を募集します（あわびの種類は問いません）。皆様からの支援の貝を七色に輝かせ、復興の光に変えたいと思います。ご支援よろしくをお願いいたします。

送り先：〒027-0038 岩手県宮古市小山田 2-2-1 マリンコープ DORA 店長 菅原則夫さん  
（送料は、発送者ご負担でお願いいたします）



「かけあしの会」製作「あわび蛸一三陸絆」。

○みやぎ生協：

- ・ふれあい喫茶で使用のお菓子（各地の名産品など）を募集しています。連絡先は、みやぎ生協ボランティアセンター（022-218-3880）まで。
- ・被災された方の手作り品が掲載されている「手作り商品カタログ」のお届けを始めました。ご希望の方は、みやぎ生協ボランティアセンター（FAX 022-218-3663 またはメール sn.mfukushinet@todock.jp）まで。※関連記事、本誌 3 ページに掲載。

新着

○食のみやぎ復興ネットワーク：「宮城県漁協志津川支所」に漁船・船外機・フォークリフト・わかめ収穫用コンテナを、「JA いしのまき」に海水淡水化装置、いちごの出荷作業用のスーパーハウス（幅 2.3m、長さ 5.4m、高さ 2.6m 程度の大きさ）を贈るため、上記物品、あるいは、支援金を募集。連絡先は、みやぎ生協 藤田 孝さん（022-772-6141）まで。

○福島県生協連

- ・「福島子ども保養プロジェクト」の①スタッフ、②大型連休の保養受け入れ先募集。①は、1 カ月単位で毎週末参加可能な方を。②のご提案は、企画（日程、募集対象者、募集人数、スケジュール、参加者負担額等）を明確にした上で、ご連絡ください。連絡先は、福島県生協連 根本 喜代江さん（024-522-5334）まで（保養の企画、運営、費用は、主催者にご負担いただきます。ご了承ください）。
- ・「土壌スクリーニングプロジェクト」ボランティア募集開始。実施内容は、土壌スクリーニング機についての事前学習と放射線測定です。場所は、JA 新ふくしま管内（福島県福島市）で、1 日最大 6 チームを編成し、1 日 150 カ所の測定を目標としています。応募先は、福島県生協連 HP（http://fukushima.kenren-coop.jp/ 「福島県生協連」で検索。Facebook も始めました。「土壌スクリーニング」で検索）。

本号外部取材スタッフ：荒川和巳、野口武、山田省蔵